2009（平成21）年11月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS 2009.11

韋編（いへん）

愛知大学図書館報

No.36

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

大学図書館と「大学の道」へのいざない

ー「大学の道にしばし習はさむの本意」（源氏物語）ー

豊橋図書館長　和　田　明　美

1. 愛知大学豊橋図書館の現状

愛知大学図書館は、蔵書やOPACシステムの充実はもとより、他大学間相互協力と資料の共有化・データベース化等の推進により、目下、着実かつ堅実な発展の途にある。入館者は360,849名（前年度比18,167増）に達し（一日平均732名）、今春4月から7月までの利用者も、既に162,938名（前年度比715増）を数える。春学期試験前後には一日3,000人程の入館者があり、カウンター業務は多忙を極めている。

図書館ガイダンスに関しては、文学部・経済学部・短期大学部の新入生100%受講を目指すカリキュラム編成や教学指導体制等と相俟って、昨年度106回、計1,864名が講習（入門ガイダンス・入庫ガイダンス・データベース講習会・専門ゼミガイダンス等）を受けるに至った。図書館スタッフも、159万冊を優に上回る蔵書と十数の貴重文庫を擁する愛知大学図書館が身近な存在となることを願って、文献資料やデータベース等をフルに活用してのキャンパスライフサポートに徹している。平日夕刻より閉館9時まで、土・日開館日には、一般市民や社会人が20名前後訪れ、夏休みの地元高校生の利用も少なくない。現に、昨年度の館外個人貸出し6,570冊の一割は、一般社会人によって占められている。

特色ある文庫の価値も、昨今改めて見直されつつある。昨年度末には、「東亜同文書院・東亜同文会雑誌記事データ」を、皓星社の「雑誌記事索引集成データベース」へ提供するに伴い、1アクセスの条件で5アクセスの提供を受けるという恩恵に浴した。東亜同文書院関係の「霞山文庫」は勿論のこと、日中戦争関係の「江口文庫」の閲覧希望者も海外にまで及び、閲覧件数も増加している。とりわけ、今春3月シカゴ大学（アジア学会）での藤田佳久教授や成瀬さよ子氏らによる、東亜同文書院についての報告並びに「霞山文庫」関係出版物の展示は、国際的にも脚光を浴び、朝日・読売・中日新聞等の紙面を賑わせた。

2. 「大学の道」と大学寮

今日、大学（短大含）進学率は76%と飛躍的な伸びを見せている。リーマン・ショックに端を発した昨秋からの金融破綻と経済危機、また今夏の総選挙後の政界の大変動の煽りを受け、本来就職予定であった高校生が進学を希望するケースも生じているようである。国際的水準を下回る日本の奨学金制度を完備するならば、大学や大学院への進学率はさらに増加するであろう教育・研究界の現状の一端が露呈されている。実際、経済協力開発機構09年版『図表でみる教育』によると、教育支出に占める日本の「私費負担」の割合は33.3%で、OECD平均の15.3%を大幅に上回っている（公的支出は国内

総生産比3.3%で28ヵ国中27位)。

世の中が混迷し迷走する暗澹たる時代であるがゆえに、人々は知識と教養、文化と科学に依拠しつつ、確たる指針を持って生きることを切望するのではないだろうか。むしろ、人類の歴史的遺産と叡智に学び、未来を展望することの重要性を本能的に察知しているとも考えられる。時代はまさに「知の力」を求めているのである。知性と教養を涵養し「知の力」を培いうる大学に、大いなる期待を寄せていると言っても過言ではない。その一方で、激動の21世紀中盤を展望した「時代の要請」に応えられない高等・専門教育機関は、古代律令国家体制における「大学寮」と同様の運命を辿るより他ないと推察される。

古代日本の律令制度の下での高等教育は、「大学寮」で行われていた。その起源は天智朝にまで遡る。官人養成機関としての機能を果たす必要に基づき、大宝・養老令において制度的に整備されたのである。「紀伝」(漢文学・中国史)「明経」(儒学)「明法」(法学)「算」(数学)の四道(四学科)制の確立は、貞観年間(859～877)においてなされた。また、平安前期には「紀伝道」への志願者が増加し、「文章生試」や「寮試」等の選抜試験も実施された。『日本紀略』には、「斉世親王於大学寮始読書。即召得業生以下生徒三百許人」(宇多天皇・寛平八年二月条)とあり、およそ300人の学生が学ぶ高等教育機関として、官人はもとより菅原道真(紀伝道)等多くの学者を輩出したのである。

『源氏物語』の「少女(をとめ)」の巻には、「大学寮」に関連して、「大学」「学問」「学生」「入学」「寮試」「才」「師」「博士」等の語が続出する。光源氏は、わが子夕霧の元服(12歳)に際して、自らの人生を省察しつつ人間形成にとって何が重要であるのかを見極め、一方では政界の重鎮たるに必要な学問的良識を尊ぶ見地に立つ。四位であってしかるべき位も六位とし、「大学の道にしばし習はさむの本意(ほい)」に従って夕霧をあえて大学(大学寮)に入学させたのである。さらに、当該巻には「大学寮」の隆盛についての次のような叙述も見られる。「昔おぼえて大学の栄ゆる頃なれば、上中下(かみなかしも)の人、我も我もとこの道にこころざし集まれば、いよいよ世の中に、才(ざえ)ありはかばかしき人多くなんありける」(少女)。

しかしながら、「大学寮」は平安時代後期には衰退し、やがて火災や暴風による損壊も修復されることなく、治承元年(1177)の大火に伴い消滅する。「大学寮」の試験制度や教学体制・機能が形骸化し、時代の変化に対応しえなくなった時、必然的にその終焉をむかえるのである。久木幸男氏の「大学寮衰退要因は、その盛況の中に既に胚胎していた」(『日本史広辞典』1997山川出版社)との言は、正鵠を得ているのみならず、今日の大学に対する警鐘とも解される。

3. リカレント教育と大学図書館

18歳から22歳前後の学生のみならず、中高年・シルバー世代の知への欲求も高まっている。実際、大学・大学院への社会人入学者やオープンカレッジ・大学内外の公開講座等への参加者数は、退職後のシニア世代が現役世代をはるかに上回っている。自己の知的好奇心や探究心に従って、心豊かに生きることをセカンドライフの第一目的とすることが、近年の生涯学習・リカレント教育推進政策の下で可能となりつつある。しかも、ボーダレスな社会現象は、大学キャンパスの教育研究領域にも影響を及ぼし、大学における高等専門教育と研究領域のボーダーラインの緩和を要求しはじめている。即ち、生涯学習バックアップ支援体制の強化は、大学はもとより、その付属機関である大学図書館にも課せられた社会的要請と看做されるのである。

アカデミズムの扉を積極的に開くことへの社会的要請に、愛知大学図書館はどう対応するのか。何よりも、「知の枢要」としての機能を果たすべく、高度情報化社会の大学図書館としてのクオリティの向上を目指さなければなるまい。その場合忘れてはならないのは、地方都市の文字文化の枢軸としての役割である。東亜同文書院以来の価値ある伝統を継承しつつ、グローカルな見地に立って受容・開放・充実・発展を図る必要がある。地域社会との連携を一層強化し、地方都市文化の発展のために、市民図書館との相互協力・補完事業を推進することも肝要であろう。組織・体制・機能の形骸化やマンネリズム、時代の要請からの乖離により、平安時代後期に衰退・消滅した「大学寮」の歴史の教訓に学びつつ、微力ながら鋭意努力したい。